Japanese Journal of Applied Psychology
1989, No. 14., 41-48

原　著

抑うつの認知—学習説の検討（Ⅰ）

——抑うつ水準と課題遂行・認知スタイルとの関係——

園　田　明　人*

THE EXAMINATION OF THE COGNITIVE-LEARNING THEORY OF DEPRESSION (Ⅰ)

—THE RELATION OF DEPRESSIVE LEVEL TO TASK PERFORMANCE AND COGNITIVE STYLE—

Akihito SONODA

Following a review of the cognitve-learning theory of depression (Selegman's reformulated theory of learned helplessness), the experiment that was designed to examine the hypothesis—depressives are poorer at task performance and have a depressive cognitive style—is reported. The cognitive style of 14 subjects who have high or low depressive levels on the Self-Rating Depressive Scale (SDS) was evaluated by the Attributional Style Questionnaire (ASQ), the Locus of Control Scale, and the Expectation Scale for task Success. The task performance of the subjects was then examined by the Noise Escape/Avoidance Task and the Anagram task. The results were as follows: Depressives showed significantly more depressive attributional style and more external locus of control than non-depressives. No significant difference between groups was found on the Expectation Scale for Task Success. In terms of their task performance, the depressives performed better on the Noise Escape/Avoidance task and no worse on the Anagram Task than non-depressives. The result that depressives are not always poor at perfororman ce is discussed in relation to other studies which found no learned helplessness effects.

序

抑うつについての学説は，精神分析理論（Freud, 1917），認知理論（Beck, 1974），認知—学習理論（Abramson, Seligman & Teasdale, 1978），学習理論（Ferster, 1966, 1974；Lewinsohl, 1974），社会的隔離理論（Bowlby, 1969, 1973）等の立場から提唱されている。本論文では，これらのうちの認知—学習理論に沿った抑うつの研究を概観し，それに沿って行われた実験結果を報告する。

抑うつの認知—学習理論は，Seligman（1975）の学習性絶望感（Learned Helplessness）仮説，及びその修正仮説（Abramson, et al, 1978）に基づいている。反応と強化との間に随伴性のないこと（対処不能性 uncontrolability）を学習した生活体は，将来も随伴性はないという期待が生じ，随伴性のある学習課題での遂行が遅滞するということがこの仮説の基本となっている。そして，Learned Helplessness の症状・病因等が反応性う

* 上智大学文学研究科
Department of literature, Sophia University

つ病の症状・病因等と類似していることから，“抑うつの実験モデル”が提唱された。また，後の仮説の修正では，抑うつ症状の程度の重さには，対処不能性に対する原因帰属が媒介していることが付け加えられた。こうした Learned Helplessness の研究の中で，特に抑うつについての研究は以下の３つに分けることができよう。即ち，①抑うつと課題遂行との関係，②抑うつと認知スタイルとの関係，③抑うつと随伴性判断との関係である。本論文では，はじめに，これらの点から抑うつ研究を概観したい。

（1） 抑うつと課題遂行との関係

Miller & Seligman (1975) は，大学生を使って，抑うつの Learned Helplessness モデルを証明しようとする実験を行ったが，その中で，抑うつ水準の高い大学生は，抑うつ水準の低い大学生に比べて，課題遂行が劣っていることが示された。さらに，非抑うつ学生でも，対処不能な前処置課題を与えられると，後の随伴性のある学習課題で遂行が劣ること，そして，その遂行レベルは前処置を受けていないナイーブな抑うつ学生と同程度であることが見出された。また，Klein & Seligman (1976) は，対処不能な Learned Helplessness の処置を受けた非抑うつ学生と，ノーマルな抑うつ学生に，成功体験を与えた後にテストを行っている。そして，その結果として，成功体験は遂行を改善することを見出している。Klein et al. (1976) は，これらの結果から，抑うつの原因は反応と強化が独立しているという信念であり，反応と強化が随伴しているというように信念を変えさせることが抑うつの治療になるということを主張した。

（2） 抑うつと認知スタイルとの関係

抑うつと認知スタイルとの関係を調べた研究としては，抑うつと帰属スタイルとの関係（Seligman, Abramson, Semmel & von Baeyer, 1979；小島，1983，新名，1984），帰属スタイルとストレス性抑うつムード反応との関係（Metalsky, Abramson, Seligman, Semmel, & Peterson, 1982；Metalsky, Halberstadt, & Abramson, 1987），抑うつと hopelessness との関係（Alloy & Ahrens, 1987）についての研究等がある。

抑うつの Learned Helplessness モデルによれば，抑うつ水準の高い人には，負の事象を内的，安定的，全体的に帰属し，正の事象を外的，一時的，特異的に帰属する傾向があることが予測されている（Abramson et al, 1978）。この予測は，大学生において，抑うつ水準と帰属スタイルの水準との相関関係を調べることで，日米ともに，支持されてきている（Seligman et al., 1979；小島，1983；新名，1984）。

しかしながら，帰属スタイルと抑うつは同じものではない。抑うつ的な帰属スタイルとは抑うつになりやすい素質（diathesis）であり，その素質を持つ人に悪い結果（ストレス）が実際に起こり，その原因を内的，安定的，全体的に帰属したときに初めて抑うつになる。この“素質―ストレス・モデル(diathesis-stress model)”に基づく研究は，Metalsky らによって展開されている。

Metalsky et al. (1982) は，負の事象を内的・全体的に帰属する傾向の高い人は，試験での失敗の結果，抑うつムードが高まるが，負の事象を外的，特異的に帰属する傾向の高い人は，たとえ失敗しても，抑うつムードは高まらないことを見出している。

また，Metalsky et al. (1987) は，帰属の一般性（generality)スケール（負の事象に対する帰属の安定性次元と全体性次元の得点の単純な平均）を用いて，ストレスに対するムード反応が帰属スタイルによって異なるかどうかを調べた。その結果，試験での失敗の結果を受け取った直後は，帰属スタイルにかかわらず，どの学生も抑うつムードが高まっていたが，２日後まで持続する抑うつムード反応は帰属スタイルによって異なっていた。即ち，帰属の一般性次元の高い人（負の安定的，全体的帰属者）ほど，低成績の結果による抑うつムードは２日後も持続していた。この結果は次のように解釈された。即ち，試験で失敗すると誰でも一時的に情動が高まる（抑うつムードが高まる）が，結果についての帰属がその情動を左右し，帰属が安定的，全体的になされた場合にその情動の永続化が生じるというのである。

これらの結果は，抑うつの原因がストレスに対する原因帰属の仕方にあることを示している。即ち，負の内的，安定的，全体的帰属スタイルを持つ人はストレスが生じたときに帰属スタイルに応じた帰属をしやすいため抑うつになりやすいという“素質―ストレス・モデル”を支持するものである。

また，Hiroto (1974) や Pittman & Pittman (1979) 等は，Locus of Control の外的統制者（Externals）は，内的統制者（Internals）に比べて，Learned Helplessness になりやすいことを示している。このことは，抑うつ水準の高いものには外的統制者が多いことを示唆している。鎌原，樋口，清水（1982）や青柳・細田・小嶋（1985）は Locus of control と抑うつ水準との間に有意な相関を見出している。

最近，抑うつ者には hopelessness の認知があることが主張され，抑うつの hopelessness 説としてまとめられている（Alloy et al., 1987）。抑うつの hopelssness

説によれば，抑うつの原因は hopelessness の期待—望ましい結果は起こりにくく，嫌悪的結果は起こりやすいという信念，さらに，この結果の生起確率は変えることができないという信念—であると仮定されている。このような抑うつ者の悲観的認知を調べる目的で，Alloy et al. (1987) は実験を行っている。その結果，自己や他者の将来の予測について，抑うつ者は非抑うつ者に比べて悲観的であることが示された。さらに，非抑うつ者には自己の成功確率を過大評価し，失敗確率を過小評価する self-enhancing バイアスがみられ，また，自己の成功の原因として内的な帰属次元を選ぶことが示された。これに対して，抑うつ者には何ら社会的バイアスも，帰属の偏りもなかった。これらの結果は，抑うつ者には hopelessness はあるが，事象の認知は客観的であり，むしろ，非抑うつ者の方に認知的バイアスがあることを示している。

（3） 抑うつと随伴性判断との関係

学習理論においては，反応と結果の間には様々な随伴関係があり，それは，反応（R）した時の結果（O）の生起確率（P）の次元 P(O/R) と，反応しない（$\bar{R}$）時の結果の生起確率の次元 P(O/$\bar{R}$) との組合せでできた道具的条件づけ空間上に表される。随伴性の確率的な定義は，最も正確に判断されやすいものがとられるべきであるとの主張もあるが（Allan & Jenkins, 1980），一般的には2つの確率次元の差 $\Delta P = P(O/R) - P(O/\bar{R})$ で表すことが多い。ΔP が正の値であれば正の随伴性があり，負の値であれば負の随伴性があることを意味し，ΔP がゼロの場合には随伴性が全くないことを意味している。

抑うつの認知—学習説（Abramson et al., 1978）では，抑うつ者には自らの反応は結果をもたらさないという負の期待があり，そのため，反応—結果間の随伴性を正確に判断できないということが主張されている。Alloy & Abramson (1979) は，抑うつ学生と非抑うつ学生に随伴性判断課題を与えることでこの仮説を調べている。その結果，Learned Helplessness モデルに反して，抑うつ者の随伴性判断は正確で，逆に，非抑うつ者は，0％の随伴性を随伴性があると判断したり，50％の随伴性を随伴性はないと判断したりする illusion of control を示していた。しかしながら，最近，Vàzquez (1987) は，反応—結果随伴性における結果の性質が自己に関連したネガティブなものである場合，そのような結果が自らの反応とは独立して提示されると，抑うつ者はその事態を反応に随伴した事態であるという illusion を示すことを見出している。これらの結果から，随伴性の判断は，抑うつ者，非抑うつ者が持つ特徴的な期待によって左右されていることが考えられる。即ち，抑うつ者の持つ，自らの反応は負の結果をもたらすという期待，非抑うつ者の持つ，自らの反応は正の結果をもたらすという期待，これらの期待が随伴性の判断に illusion をもたらしているということが考えられる。

目　的

抑うつ者は抑うつ的な認知スタイルを持ち，課題遂行が劣るとする抑うつの認知—学習説は，これまでみてきたように多くの研究で支持されてきている。しかし，ヒトにおける Learned Helplessness の実験的研究の中には，Helplessness をもたらすのに十分な対処不能性の経験をし，抑うつムードが生じているにもかかわらず，課題遂行が劣ることはなく，むしろ，遂行促進が生じたという報告もある（小島，1983）。また，強矢，細田，高島，青柳（1987）は，helplessness 得点の高い者の方が低い者に比べて，認知的課題における遂行が優れているということを報告している。これらの結果は抑うつ的認知と課題遂行能力は必ずしも対応しないということを示唆している。Miller et al (1975) は抑うつの水準の高いものに遂行障害を見出しているが，同じ関係を見出した研究は他にないようである。従って，抑うつ水準と課題遂行との関係を調べる必要性がある。また，抑うつと帰属スタイルとの関係，及び，抑うつと Locus of control との関係といった，抑うつと認知スタイルとの関係についても従来の結果を再現できるかどうか確認する必要がある。そこで，本研究では次の仮説を検証することを目的とした。

仮説「抑うつ水準の高い者は，抑うつ水準の低い者に比べて，抑うつ的な認知スタイルを持ち，課題遂行に障害がみられる」

具体的には次の4つの予測が立てられた。

予測1：抑うつ群は非抑うつ群に比べて負の事象を内的，安定的，全体的，コントロール可能と帰属し，正の事象を外的，一時的，特異的，コントロール不能と帰属するであろう。

予測2：抑うつ群は非抑うつ群に比べて外的 Locus of control 特性を持っているであろう。

予測3：抑うつ群は非抑うつ群に比べて課題成功の期待が低いであろう。

予測4：抑うつ群は非抑うつ群に比べてアナグラム課題やノイズ逃避課題での遂行が劣っているであろう。

方　法

被験者

男女大学生30名（男子13名，女子17名）。

装置・材料

(1) 抑うつ水準の測定‥被験者の抑うつ水準を測定するために，自己評価式抑うつ尺度（Self-rating Depression Scale: SDS）日本版を使用した。これは，Zung (1965) が作成したものを福田，小林 (1973) が日本版として標準化したものである。

(2) 帰属スタイル測定‥被験者の帰属スタイルを測定するために，帰属スタイル質問紙（Attributional Style Questionnaire: ASQ）日本版を使用した。これは，Seligman, et al. (1979) が作成したものを小島 (1983) が日本版として翻訳したものである。正と負の事象に対する原因帰属の次元は，内在性（Internality）次元，安定性（Stability）次元，全体性（Globality）次元の3次元に，コントロール可能性（Controlability）次元を加えた4次元でできていた。

(3) Locus of Control 測定‥被験者の Locus of Control (LOC) を測定するために，鎌原ら (1982) の作成した LOC 尺度日本版を用いた。

(4) 期待測定‥被験者の課題に対する成功の期待（主観的成功確率）を測定するために，期待尺度を使用した。これは，本研究のために作成されたもので，「あなたはこの課題でどの位成功できると思いますか」という質問に，0-100%（10%キザミ）で評定させるものである。

(5) ノイズ逃避／回避課題‥視覚刺激として直径1cm.の黄，緑，赤ライトを使用した。ライトは黒いベニア板（幅40cm，長さ50cm）に取り付けられ，直立して立てられた。ノイズ刺激提示用として，ベニア板の両わきに2つのスピーカーが置かれた。スピーカーはノイズジェネレーターに中継され，85dB のノイズが発生するようにセットされていた。反応操作機として，黒いアルミ製の箱（幅20cm，奥行き11cm，深さ5cm）の上の中央に，ジョイスティックが取り付けられたものが使われた。ライト，ノイズジェネレーター，反応操作機はいずれも隣室のパーソナルコンピューター（PC8801）のインターフェースに中継されており，全ての制御，記録はコンピューターの Basic プログラム上でなされた。

(6) アナグラム課題‥パーソナルコンピューター PC-8801に接続された白黒ディスプレーが刺激提示用として使われた。

手続き

被験者はあらかじめ SDS に評定し，1～2週間後，実験室に呼ばれた。実験室にくると，被験者は ASQ と LOC 尺度に評定し，課題成功の期待尺度に評定した後，ノイズ逃避／回避課題とアナグラム課題に取り組んだ。被験者の半数はノイズ逃避／回避課題を先に行った後アナグラム課題を行い，残りの半数はその逆の順に課題を行うというように，2つの課題を行う順序はカウンターバランスされていた。

ノイズ逃避／回避課題は黄色いライトが5秒間点灯した後にノイズが5秒間鳴り，ジョイスティックの操作によってノイズを逃避／回避させる課題であった。黄色いライトの点灯中に正反応があればノイズを回避でき，ノイズの鳴っている間に正反応があればノイズから逃避できた。正反応は，中央に位置しているジョイスティックを試行ごとに左右交互に1回倒し，中央に戻すことであった。即ち，第1試行では左に倒すことが正反応であり，第2試行では右，第3試行では左というように，正反応は決められていた。但し，もしもその試行における第1反応が誤反応であった場合には，たとえ第2反応で正反応側へ倒したとしても，その試行は失敗とみなされ，ノイズを5秒間聞かなければならなかった。正反応によってノイズの逃避／回避が出来た場合には緑のライトが，失敗の場合には赤のライトが試行の終わりから次の試行の開始まで点灯していた。30試行の discreat（離散）手続きで，ITI（試行間間隔）は平均20秒（12～30秒）であった。教示は次のようであった：

「黄色のランプが5秒間ついた後，比較的不快なノイズが最大5秒間鳴ります。ノイズは止める方法がありますので，あなたはその方法を推測してできるだけ早くノイズを止めて下さい。ノイズが止まった後に緑色のランプがついたら，それは，あなたの推測が正しかったためにノイズが止まったことを意味します。赤色のランプがついたら，それはノイズが5秒間鳴って自動的に止まったことを意味します。数秒間の異なった間隔の後，再び黄色いランプがつき，次の試行が始まります。これを30試行繰り返してください」

この課題の測度として，次の3つが分析された：(1) 失敗数（number of errors）－30試行のうち，逃避／回避に失敗した試行数，(2) 基準達成試行数（trials to criterions）－3試行連続成功し，それ以降失敗試行のない基準に達するまでの試行数，(3) 平均反応潜時（mean response latency, msec.）－逃避／回避に成功するまでの時間。5秒以内の潜時は回避を，5秒以上の潜時は逃避を表し，失敗の場合には10秒の潜時が記録された。

アナグラム課題は，片仮名５文字でできた日本語名詞が全問３－４－２－５－１の順に並んだものを正しく読ませるもの30問であった。刺激語は予備実験の結果，反応時間の適当なものの中から30語が選ばれた。文字は１問ずつディスプレーの中央に提示された。反応時間はコンピューターの内蔵クロック（秒単位）が使われ，被験者が正反応をした時点で実験者がキーを押すことで測定された。教示は次のようであった：

「これからやっていただくのは５文字のアナグラムという課題です。アナグラムというのは，有意味単語の文字の配列がバラバラにされたものです。あなたにやってもらうアナグラムは，カタカナ５文字でできた日本語の名詞です。例えば，

“ニチビョウ”

のようにバラバラにされた文字が１問ずつ画面に提示されますので，意味の通る正しい単語に直してください。正しい単語がわかったらすぐに口頭で答えてください。いろいろな読み方ができる場合があるかもしれませんが，こちらで用意した答えを見つけるまで続けてください。もしも，こちらで用意した答えと違う場合には“ノー”といいますので，そのまま続けてください。制限時間は１問につき100秒です」

この課題の測度は，平均反応潜時（sec.）と失敗数であった。

以上で実験は終了した。

結　果

抑うつ水準

30人の被験者のうち，上位・下位各々約25%（７人）の SDS 平均得点について t 検定を行ったところ，有意差がみられた（P<0.01）。そこで，上位の者を抑うつ群，下位の者を非抑うつ群として以下の分析を行った。

帰属スタイルと抑うつ水準

抑うつ群と非抑うつ群における ASQ 次元得点と合成得点の平均値と標準偏差は，Table 1 に示す通りであった。t 検定の結果，抑うつ群は非抑うつ群に比べて負の事象を全体的に帰属する傾向があり，正の事象を有意に

Table 1　Means and Standard Deviations of ASQ and LOC Scales and Task Performances Scores for Depressed and Nondepressed Students.

		Depressed	Nondepressed	t test	
		M　(SD)	M　(SD)	t	p
Attributional Style					
Nega-	Internal	27.9 (2.91)	29.4 (4.79)	−0.742	ns
tive	Stable	32.6 (3.36)	31.9 (3.48)	0.390	ns
	Global	29.4 (4.65)	22.9 (8.05)	1.870	.0860
	Controlable	19.3 (2.36)	21.0 (8.23)	−0.568	ns
Posi-	External	15.3 (3.25)	12.6 (5.50)	1.123	ns
tive	Unstable	11.4 (4.35)	6.6 (4.24)	2.115	.0560
	Specific	11.7 (5.22)	11.4 (5.59)	0.099	ns
	Uncontrolable	22.1 (3.76)	14.4 (7.02)	2.563	.0249
Total		169.7 (9.47)	150.1 (24.32)	1.837	.0992
Locus of control		25.4 (6.85)	18.7 (4.50)	2.167	.0511
Escape/avoidance task					
Response latency (ms)		6536(453.6)	7360(1225.0)	−1.669	ns
Number of failure		5.9 (1.77)	11.7 (4.39)	−3.276	.0066
Trials to criterion		15.0 (4.40)	24.9 (8.84)	−2.642	.0215
Angaram task					
Response latency (s)		22.0 (9.98)	24.7 (10.93)	−0.475	ns
Number of failure		3.4 (2.70)	4.1 (2.34)	−0.529	ns

ns=7　df=12

* higher scores indicate greater depressive attributional style, greater external locus of control, and greater task impairment.

一時的，コントロール不能に帰属していた。また，全ての次元を合成した得点においても，抑うつ群は非抑うつ群に比べて抑うつ的な帰属スタイル（抑うつの素質 diathesis）を持っていることが示されていた。従って，予測1は部分的に支持された。この結果は，弱いながらも，Seligman, et al.（1979）や小島（1983），新名（1984）の結果を再現するものであったといえよう。

Locus of Control と抑うつ水準

抑うつ群と非抑うつ群の平均 LOC 得点と標準偏差は Table 1 に示す通りであった。t 検定の結果，抑うつ群は非抑うつ群に比べて有意に外的な Locus of Control 特性を示していた。従って，予測2は支持された。このことは，helplessness と LOC の関係についての認知—学習説の予測（Abramson, et al., 1978）を支持するものであり，また，鎌原ら（1982）の結果と一致するものでもあった。

成功の期待と抑うつ水準

ノイズ逃避／回避課題とアナグラム課題それぞれに対する成功の期待（主観的成功確率）得点は，t 検定の結果，2つの課題に対する期待共に，抑うつ群と非抑うつ群との間に有意差はみられなかった。従って，予測3は支持されなかった。

課題遂行と抑うつ水準

2つの課題における抑うつ群と非抑うつ群の遂行は，Table 1 に示す通りであった。t 検定の結果，ノイズ逃避／回避課題では，抑うつ群は非抑うつ群に比べて有意に失敗数が少なく，基準達成試行数が少なかった。一方，アナグラム課題では，抑うつ群と非抑うつ群との間に有意差は認められなかった。このことから，予測4は支持されず，逃避／回避課題ではむしろ抑うつ群の方が遂行が優れているという，予測に反する結果が現れていた。

考　察

本研究は，抑うつ水準の高い大学生に negative な認知スタイルと課題の遂行障害が見られるかどうかを調べる目的で行われた。その結果，抑うつ水準の高い者には抑うつ的認知構造はあるものの，必ずしも遂行障害を示すものではないことが確認された。即ち，抑うつ者は外的 locus of control を持ち，抑うつ的な帰属スタイルを持っていたが，道具的な課題では非抑うつ者よりも遂行が優れていた。

抑うつ者は非抑うつ者に比べて外的な Locus of control を示すということは，抑うつ者には反応は強化と結びつかないという期待があることを示しており，抑うつの LH モデルを支持する結果であったといえよう。また，抑うつ群には非抑うつ群に比べて抑うつ的な帰属スタイルを持つ傾向が示されていた。しかし，強い関係はみられなかった。このことは，抑うつと帰属とは同じものではないということを示している。素質—ストレス・モデルで主張されているように，抑うつ的な帰属スタイルを持つ者は，それだけで抑うつなのではなくて，実際にストレスが加わった結果として抑うつになるのである。本研究での抑うつ水準と帰属スタイルとの関係についての結果は，素質—ストレス・モデルを支持するものともいえよう。

課題遂行において，抑うつ群の方が遂行が優れていたという結果については，いくつかの理由が考えられる。1つには，Alloy, et al.（1979）の指摘した illusion of control の影響，即ち，非抑うつ者は反応—結果関係の知覚が不正確だが，抑うつ者は正確であるということによる影響が考えられる。つまり，事象に対する認知的正確さが本実験の抑うつ群の道具的学習を促進していたということが考えられる。

また，被験者は実験室において，与えられた課題をやらなければならなかった。このことは，特に抑うつ者に緊張状態をもたらし，遂行を高める効果となって現われたのかもしれない。あるいは，課題の性質が，動機づけの低さを反映するものではなかったことも考えられる。

しかしながら，抑うつ者は，非抑うつ者に比べて，課題の遂行能力がもともと高いということも考えられる。helplessness 得点の高い者の方が低い者に比べて，認知的課題における遂行が優れているということを見出した強矢ら（1987）の結果は，本研究における結果とも一致するものである。対処不能な嫌悪的事象を経験すると後の学習課題で遂行が遅滞するという Learned Helplessness の仮説を支持する結果は，これまでの日本のヒトにおける実験的研究でみられていないが（小島，1981，1983等），抑うつ水準の高いものに遂行遅滞がみられないのだから，実験的に helplessness になった者に課題の遂行遅滞がみられないのは当然のことであるかも知れない。抑うつ水準と課題遂行との関係については種々の課題を使うなどによって，さらに詳しく調べる必要があろう。

今回の研究は，抑うつ者の持つ認知的・行動的特徴をとらえようとするための研究であった。しかし，抑うつの認知—学習説における最も特徴的な点は，抑うつの因果的説明をしているという点にあるといえよう。その意味では，ストレスと帰属の交互作用によって抑うつが生ずるという「素質—ストレス・モデル」をさらに検証し

ていくことが求められるであろう。今後は，ストレスと帰属の要因を取り入れた実験を行う必要があろう。

文　献

1) Abramson, L. Y., Selgman, M. E. P. & Teasdale, J. D.: Learned helplessness in humans: critique and reformulaion. *Journal of Abnormal Psychology*, 1978, **87**, 49-74.
2) Allan, L. G., & Jenkins, H. M.: The judgement of contingency and the nature of the response alternatives. *Canadian Journal of Psychology*, 1980, **34**, 1-11.
3) Alloy, L. B. & Abramson, L. Y.: Judgement of contingency in depressed and nondepressed students: Sadder but wiser ? *Journal of Experimental Psychology: General*, 1979, **108**, 441-485.
4) Alloy, L. B. & Ahrens, A. H.: Depression and Pessimism for the Future: Biased Use of Statistically Relevant Information in Predictions for Self Versus Others. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1987, **52**, 366-378.
5) 青柳　肇・細田一秋・小嶋正俊：学習性無力感に関する研究その１．—無力感尺度の作成とその信頼性・妥当性—．立川短大紀要，1985, **18**, 17-24.
6) Beck, A. T.: The development of depression: A cognitive model. In Friedman, R. J. & Katz, M. M. (Eds), *The Psychology of depression. Contemporaly theory and research*, Winston Wiley & Sons, 1974.
7) Bowlby, J.: *Attachment and Loss* (Vol. 1) Attachment. Penguin Books, 1969.
8) Bowlby, J.: *Attachment and Loss* (Vol. 2) Separation: Anxiety and Anger. Penguin Books, 1973.
9) Ferster, C. B.: Animal behavior and mental illness. *Psychological Record*, 1966, 16, 345-356.
10) Ferster, C. B.: Behavioral approaches to depression. In Friedman, R. J. & Katz, M. M. (Eds), *The Psychology of depression. Contemporaly theory and research*. Winston Wiley & Sons, 1974.
11) Freud. S: Mourning and melancholia. *The Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, 1917, Standard Edition (Vol. **14**), London: Hogarth Press, 1957, pp 243-258.
12) 福田一彦・小林重雄：自己評価式抑うつ性尺度の研究，精神神経学雑誌，1973, **75**, 673-679.
13) Hiroto, D. S.: Locus of Control and Learned Helplessness. *Journal of Experimental Psychology*, **102**, 187-193.
14) 鎌原雅彦・樋口一辰・清水直治：Locus of Control 尺度の作成と，信頼性，妥当性の検討．教育心理学研究，1982, **30**, 38-43.
15) Klein, D. C. & Seligman, M. E. P.: Reversal of Performance Deficits and Perceptual Deficits in Learned Helplessness and Depression. *Journal of Abnormal Psychology*, 1976, **85**, 11-26.
16) 小島理恵：人間の学習性無力感：不安特性と原因帰属による一考察．社会心理学評論，1981, **1**, 71-78.
17) 小島理恵：女子大生における原因帰属スタイルと抑うつ水準との関係—ASQ 日本版による検討．日本心理学会第47回大会発表論文集，1983 a, 425.
18) 小島理恵：学習性無力感の発生過程における失敗経験量と原因帰属の役割．日本教育心理学会大会発表論文集，1983 b, 628-629.
19) 強矢秀夫・細田一秋・高島直子・青柳　肇：学習性無力感に関する研究，その３．—認知的課題及び帰属スタイルとの関連—．立川短大紀要，1987. **20**, 23-28.
20) Lewinsohn, P. M.: A behavioral approach to depression. In Friedman, R. J. & Katz, M. M. (Eds), *The Psychology of depression. Contemporaly theory and research*, Winston Wiley & Sons, 1974.
21) Metalsky, G. I., Abramson, L. Y., Seligman, M. E. P., Semmel, A. & Peterson, C.: Attributional style and life events in classroom: vulnerability and invulnerability to depressive mood reactions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1982, **43**, 612-617.
22) Metalsky, G. I., Halberstadt, L. J. & Abramson, L. Y.: Vulnerability to depressive mood reactions: toward a more powerful test of the diathesis-stress and causal mediation components of the reformulated theory of depression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1987, **52**, 386-393
23) Miller, M. R. & Seligman, M. E. P.: Depression and learned helplessness in man. *Journal of Abnormal Psychology*, 1975, **84**, 228-238.
24) 新名理恵：ASQ 日本版による大学生の原因帰属スタイルの検討．日本心理学会第48回，大会発表論文集，1984, 619.
25) Pittman, N. L. & Pittman, T. S.: Effects of amount of helplessness training and internal-external locus of control on mood and performance. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1979, **37**, 39-47.
26) Seligman, M. E. P.: 平井　久，木村　駿（監訳）うつ病の行動学—学習性絶望感とは何か (Helplessness: on depression, develop-

ment, and death, 1975). 誠信書房, 1985.
27) Seligman, M. E. P., Abramson, L. Y., Semmel, A. & von Baeyer, C.: Depressive attributional style. *Journal of Abnormal Psychology*, 1979, **88**, 242-247.
28) Vàzquez, C.: Judgment of contingency: Cognitive biases in depressed and nondepressed students. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1987, **52**, 419-431.
29) Zung, W. W. K.: A self-rating depression scale. *Archives of Genral Psychiatry*, 1965, **12**, 63-70.